

山本登著

新版
世界經濟論

泉文堂版

著者略歴

山本 登
もと のぞみ

一九二二年 東京に生まれる。

一九三五年 慶応義塾大学経済学部卒業

一九四八年 同大学助手、助教を経て教授

就任

一九六〇年 経済学博士

一九七八年 同大学名誉教授

その間、同大学国際センター所

長、常任理事を歴任

現在 創価大学経済学部教授

専攻 世界経済論、東南アジア経済論

住所 〒一四五 東京都大田区田園調

布三二二一九

3033—180005—3908

昭和五十五年四月一日 新版第二刷発行

定価三〇〇〇円

(新版 世界経済論)

著者との申し
合せにより検
印省略

著者 山本 登

発行者 大坪 嘉春

印刷所 東京都千代田区猿樂町二一六―三
松沢印刷株式会社

発行所 東京都新宿区下落合一―二―一六
株式会社 泉文堂

電話東京(函) 九六一〇番
振替東京 5―一三八〇四番
郵便番号 一六一

山本 登 © 1979

本書の内容の一部あるいは全部を無断で複写複製(コピー)することは法律で認められた場合を除き著者および出版社の権利の侵害となりますのでその場合には予め小社あて許諾を求めて下さい。

序

すでに長い学問的研究の成果をもつ領域においては、研究対象は明確に捕捉され、かつ方法論上の統一もみい出される。しかし研究の未熟な部門においては、対象も一義的には規定しえないし、その方法についても統一性を求めることが困難である。世界経済に関する研究は、およそ後者の段階にあるように思われる。

概括的にいって、「世界経済論」は世界経済の理論的・実証的研究を扱う学問の分野であるといえる。しかしそこにはいまだ理論的な緻密さはえられていないし、世界経済の概念そのものも不確定である。実証的研究の部面においては、その範囲は広範多岐にわたり、統一的把握が欠けている。これまでの経過において、イギリス正統学派に端を発する伝統的な世界経済論は、主としてその国際貿易論のなかにおいて、政策的主張をおびて展開せられた。これに対して、マルクシズムの立場よりするものは、資本主義的世界経済機構の分析と、その矛盾の摘出にのみ重点をおいた。したがってそれらはともに、世界経済の研究を、しばしば特定の価値判断をとまなう評価の対象とした感が深い。

もとよりこのような特定の価値判断を排除して純粹に理論的な研究が皆無であつたわけではない。しかしこの場合には、純粹に抽象的な理論に墮するか、あるいは少なくとも現実の世界経済現象の基底に横たわる歴史的・社会的関係を見逃しがちとなる。ここに世界経済の研究が、いま一度過去を反省して、世界経済現象の客観的な認識と分析からの再出発を必要とする理由がある。

現代における世界経済の研究に与えられた任務は、理論的にはその明確な概念の規定を目指しつつ、またそのためにこそ、何よりも統一ある方法に基づいての世界経済の生成・発展・動向についての考察であろう。

とくに指摘するまでもなく、単に外面的な国際間の経済的交流は、すでに古代、中世の昔から存在した。しかし個人にとってもまた一国民経済にとっても、世界的規模においての経済的関連が必須不可欠のものとなったのはすぐれて近代資本主義成立以降のことである。

このような観点から、本書は世界経済の概念については、従来の諸見解を整理することによって一応の規定を試みるにとどめ（第一章）、主として世界経済の歴史的発展の経過とその内面的機構ならびに現実の動向の検討に主点をおいた。というのはその客観的な分析のうちから、現実の世界経済体制の進展方向に関する理解の手がかりを求めたいからである。

こうして世界経済の研究は、近代資本主義の成長史において、とりわけ、世界経済的諸要因がますますわれわれの生活を規制するにいたったところの、高度の資本主義的發展に則してとり上げられなければならない。このような意味から近代資本主義の生成・発展の考察は、いわば前提的部分に当り（第二章および第三章）、次いで、かくして成立した資本主義的世界経済機構の内部における世界経済的諸要因の機能を明らかにする必要がある（第四章、第五章および第六章）。そのうえに現実の世界経済の動向についての綿密な考察と将来への洞察が要請される。

この場合、現世代のわれわれに課せられた当面の課題は、二つの世界大戦を通じて変転しつつある世界資本主義そのものの構造的変化の実態の解明である。すでに第一次世界大戦を通じて呈示された世界経済の諸特徴が、そ

の後の世界経済恐慌を経過し、さらには、第二次世界大戦を体験して、どのような動向を示しつつあるか（第七章）。ここに当然大きく映像されてくるのは、世界経済の組織化の傾向であり、また米・ソの対立に端的に表現される二つの世界経済体制の分立的進展である（第八章）。この経緯を踏みながら、現段階の世界経済は、西に東に、いかなる問題を提起しつつあり、かつ、いかなる方向へと転回を示すであろうか（第九章）。

一方においてアメリカ合衆国を首班とする資本主義的世界経済体制が強固に復活し、さらに多分に計画的要素をとり入れることによって、いっそう高度の資本主義的發展を迎えうるのであるか。他方あるいは二つの世界経済体制の摩擦の激化が、打ち続く混乱の後に、大きな変貌と新たな展開を導くであろうか。軽率な予断はもとより避けなくてはならないが、本書の扱うところが、この目的のために幾分でも材料の提供に役立つならば、そのかぎりにおいて、本書の役割の過半は果されたことになる。とりわけ、このような世界経済の推移のなかにおかれた日本経済の地位、さらにはまた二つの世界経済体制の対立的發展の間における過渡的形態としてのいわゆる「混合経済制度」への考慮を含めて（第十章）、現段階における世界経済研究の担う理論的・実証的な課題が、われわれにとって切実なものであることを示せば足りるのである。

もちろん、本研究の究極の目標は、この領域における学問的体系の樹立におかれなければならない。これに到達する道はなお迂遠なものであらう。本書の試みが、これに向かつての一里塚としてでも役立ちうれば、筆者にとっては望外の幸せである。大方の御叱正を乞うゆえんである。

終りにこの機会を利用して、常に御指導と御鞭撻を惜しまなかった慶応義塾大学経済学部 諸先輩・同僚の

序

四

方々の日頃の学恩に心より御礼を申し上げるとともに、友情に甘えて種々の御面倒を煩わした泉文堂社長中村仙一郎氏ならびに校正の労をとられた同社の茅原要三氏に深く感謝の意を表したい。

昭和二十四年十二月

山 本 登

新版の序

本書が改訂を重ね、四訂を刊行してから、すでに一〇数年を経過した。その間、常に本書の全面的な書き直しを意図とはしていたが、たまたま学内の理事職を二度にわたって引き受けたりしたために、雑務に追われて、その時間的な余裕をもたなかったことを、自から遺憾に思っている。

本年三月、四十三年間勤めた慶応義塾大学を定年で退職した。そして四月からは慶大・名誉教授に推され、かつ引き続き三田で一コマの「世界経済論」の講義と、もう一コマの大学院経済学研究所・博士課程の演習を担当している。

加えて、同じ四月から新たに就任した創価大学経済学部で、特別講義として「世界経済論」を講じている。長年の講義の延長線上に近年の世界経済の動きのなかでの諸問題点の解明を織りまぜながら、講述することは自分の責務であることを感ずると同時に、楽しいこともある。

しかし、さきに述べた最近一〇数年の間に、世界政治・経済のうえには、いわゆる南北問題が台頭し、その後種々の要因のからみ合いを通じて、この問題はいつそう複雑な様相を示してきている。

このような観点から、いまいちど既刊の「四訂世界経済論」を通読してみると、実は次の二点に気付いた。

(1)は、なお昔の表現方法や旧仮名づかいが用いられていて、新しい世代の学生諸君には、読みづらい個所が多

いこと。

(2)は、最近一〇数年の間に起きた諸課題の検討が欠けていること、である。

この関連で、ことに一九六〇年代からの南北問題の台頭と展開を軸として、世界政治・経済上のこの新たな課題についての分析を補充する必要性を痛感した。

本来ならば、この時点でききに指摘したように、本書の全面的な改訂にとり組むのが適切であるに相違ない。

だが意外と多い雑用の整理に追われて、まず(1)全編を通じて旧仮名づかいを改めるとともに、新たに(2)第九章「南北問題の進展と日本の役割」を補足して、最近の諸課題への解答を提示することにした。

その成果について、いまなお決して満足しているわけではないが、結論として、現段階の世界経済がまさしく再編成期を迎えていることを強調しておきたい。

昭和五三年二月

目次

第一章	世界經濟の概念	三
第一節	世界經濟時代	三
第二節	國民經濟と世界經濟	六
第三節	世界經濟學への志向	一三
第四節	世界經濟の概念	二一
第二章	世界經濟の形成過程	三一
第一節	近代資本主義の起源	三一
第二節	近代的産業發達の諸條件	三六
第三節	イギリスにおける産業革命の基盤形成	四二
第四節	産業技術の發展と産業革命の進行	五一
第五節	重工業部門における産業革命	五六
第六節	フランス、ドイツ、アメリカにおける産業革命	六三
第三章	資本主義的世界經濟の發展	七三

第一節	世界生産諸力發展の実相	七三
第二節	交通機關の發達の役割	七八
第三節	國際貿易の發達と世界市場戰	八二
第四節	國際投資問題の台頭	八六
第四章	世界生産機構の分析	九三
第一節	近代資本主義の三段階	九三
第二節	生産の大規模化と集中	九六
第三節	近代的独占の形成	九九
第四節	近代的独占の形態	一〇二
第五節	ドイツ、アメリカにおける独占の發展	一〇七
第六節	資本主義「組織化」問題の一面	一六
第七節	國際的独占の發展	二〇
第五章	世界市場の構成	二七
第一節	世界市場形成の必然性	二七
第二節	國際的分業の成立と發展	三二
第三節	大工業の發達と世界市場の拡大	三八

第四節	保護貿易政策と自由貿易政策	一四四
第五節	世界貿易の発達と編成	一五四
第六節	独占段階と高率関税政策	一六二
第六章	国際投資の諸問題	一六九
第一節	資本の集中と金融資本の成立	一六九
第二節	国際貿易と国際投資	一八一
第三節	国際投資の意義	一八八
第四節	国際投資の世界経済的機能	一九四
第五節	植民地の世界経済的意義	一九九
第六節	国際投資の実相	二〇八
第七章	二つの世界大戦と世界経済恐慌	二一五
第一節	後発諸国の台頭と第一次世界大戦	二一五
第二節	第一次世界大戦後の世界経済の変貌	二二三
第三節	世界経済恐慌の進展と実相	二三一
第四節	世界経済の梗塞化と第二次世界大戦の開幕	二四一
第八章	第二次世界大戦後の世界経済	二五一

第一節 戦後世界経済の特徴と基本的動向	二五一
第二節 世界経済体制の再調整期	二六一
第三節 社会主義世界市場の成立と発展	二六五
第四節 世界経済の地域化傾向の台頭	二七四
第五節 先進国と発展途上国の発展の乖離	二八三
第六節 「発展途上国問題」の時代	二八九
第九章 南北問題の進展と日本の役割(資源問題を含めて)	二九三
第一節 南北問題の基本的考え方	二九三
第二節 南北問題と太平洋経済圏	二九九
第三節 資源問題の世界政治・経済学―日本の立場を含めて―	三一九
第四節 南北問題の進展とアジアにおける日本の役割	三三二
第五節 世界経済の再編成期	三四五

新 版
世
界
經
濟
論

第一章 世界經濟の概念

第一節 世界經濟時代

人間經濟生活の形式あるいは内容が、段階的な發展過程をたどるとする観点から、しばしば、われわれはいまや、世界經濟時代にあるものと説かれる。保護貿易主義の熱烈な主唱者であり、經濟發展段階説の提唱者であったフリードリヒ・リストは、つとに将来における國際交通の絶對的自由を念願とし、この發展の最高段階において、國民經濟より世界經濟への移行を想定した。彼によれば「考え得られる最高の結合は、全人類のそれであり」^(註) また「将来と全人類のために、哲学は次のことを要求する。諸國民が相互にますます接近すること、戦争をできるだけ回避すること、國際的の法律狀態を樹立し發展せしむること、今日國際法と呼ばれているものから連邦法へ移行すること、精神上および物質上の國際交通を自由にすること、最後に、すべての國民が制定法の下に統一せられて世界連合 (Universalunion) を形成すること」^(註)。かくして世界連合と永久平和の実現こそが、彼の究極の理想であつたのである。すなわち世界連合と永久平和との理念が、理性によつてもまた宗教によつても要求

されていることは、争うべくもない。……歴史の教えるところによれば、個々人が戦時状態にあるとき、人間の幸福は最低段階にあり、人々の結合が増大するに比例して、幸福もまた向上するものであると。人類の原始状態において家族結合をみ、次に都市を、その次に諸都市の同盟を、さらにその次に全国の結合を、最後に制定法のもとにおける多数国家の結合をみるのである。事物の性質が、家族に始った結合を数百万人にまで拡大することのできるほど強大なものであるならば、それはまたあらゆる諸国民をも結合させることのできるほど強固なものと考えられてよいはずである。人間の精神がこの大結合の利益を把握することができるとすれば、それはまた全人類の総体結合の利益をも理解することのできるものと考えられてよいはずである。多数の兆候が世界精神のこのような傾向を暗示している。われわれはただ、科学・芸術・発明・産業および社会的秩序における進歩を想い起こせばよい。二・三〇年の歳月がたてば、地球上において文明の最も進歩した諸国民は、運輸交通機関の完成によって、物質的交通に関しても、精神的交通においても、一世紀以前のイギリスの諸侯領地にみたと同様に、あるいはそれ以上緊密に相互に結合をすることであらう、ということとは今日すでに予想して間違いないところである。^(註三)

リストの後、その影響の下に新段階説を唱えたヨハン・クリストフ・リンネは、經濟生活の形式を個別經濟と共同經濟にわかれ、さらに後者の發展を段階的に、家族經濟・同族經濟・種族經濟・國民經濟・國民共同經濟・世界經濟となした。彼はこの最後の段階である世界經濟は、当時現存するものではないが、将来において可能な最高の經濟的發展段階と解し、それは交易ならびに政治上の自由を許すべき、世界国家あるいは少なくとも世界諸国家連合の実現された場合において初めて存在するものとみた。^(註四)